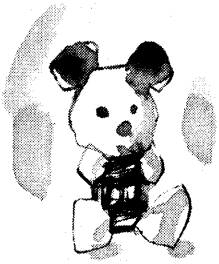
私の体験した
アメリカの幼児教育



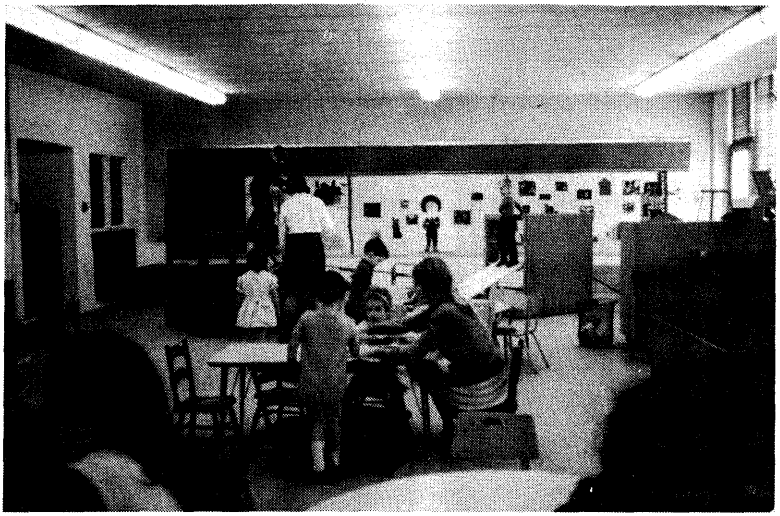
江波諄子

幼児教育の研究のために、二年間アメリカ、ペンシルヴァニア州立大学へ留学する機会を得ました私の、学校での勉学と、幼稚園での実際の経験の中から、一般的な内容紹介と、特に印象を強くうけた問題について少しお話してみたいと思います。

①大学附属ナースリースクール（幼稚園）

ペンシルヴァニア州立大学附属ナースリースクールは人間発達学部（家政学部に相当するもの）の中にあり、その中の児童発達・家族関係学科によって運営が行なわれています。この幼稚園は、学生が幼稚園教諭になるための実習の場であり、大学の研究の場であり、と同時にこの幼稚園へ通ってくる子どもの健全な教育の場という三つの大きな目的があります。コンクリートの建物の中の一階にある広い大きな明るい三つのへやに、午前と午後の部に分けて、あわせて五つのグループが編成されています。その内訳は二歳児一グループ、三歳児一グループ、四歳児二グループ、それに三歳四歳混合のランチグループひとつです。二歳児グループは週二日だけくる実験的なグループですが、他のグループは月曜日から金曜日まで毎日通ってきます。

ランチグループというのは昼食が出るグループということ



いろいろなコーナーのあるへや

なのですが、実際は低所得層からの子どもで通園料（十週間で六十ドル）無料、昼食無料支給のグループです。一グループの保育時間はふつう二時間半、人員構成は子ども二十名（男女半分ずつ）に対し主任の先生一人（修士以上の資格をもつ）、助手一人（大学院の学生）、学生五、六人でなっています。先生はふつう女性ですが、実習にくる学生の中には男子が必ず一人か二人いるというのはたのもしく思えます。ここにくる学生たちは実習のために必要な最低知識をコースで勉強してあり、同時にとっているコースでさらに実際の問題に触れる経験をします。指導方針はいわゆる従来の幼稚園のやり方をとっており、そのもととなっている考え方もキャサリン・リード(Katherine Read)の「幼稚園」(The Nursery School)やルイーゼ・ラングフォード (Louise Langford) の「幼少の指導」(Guidance of the young child) などの書物に基づいています。

②へやと遊びの内容

へやの中は次のような場が目的にそってつくられています。

a、おもに芸術的な活動につかわれるテーブル

b、指先をつかう活動につかわれるテーブル

c、科学的なものの観察につかわれるテーブル

アートテーブル

d、鏡や衣装まであるままごとコーナー
e、ブロックコーナー
f、ピアノ、その他の楽器、レコードのあるミュージックコーナー
g、低いたなに本がならべてある読書コーナー

です。

その他、へやの揚示板は大切な働きをします。その時々の季節やプロジェクト（計画）に従って学生たちによって興味深くかざられます。

それでは各々のコーナーではどんな活動がどんな材料をつかって展開されているのでしょう。

まずアート（芸術）テーブルは、子どもの毎日の生活にとってなくてはならないものです。その中でも、イーゼルペイント、フィンガーペイント、粘土、プレイドウ（ねり粉）などは子どもたちに人気があり、毎日、あるいは何日かおきにくり返し準備されます。その他、クレヨンやコンストラクションペーパー（色のついた画用紙）、ハサミは、たなに常備しておきますが、子どもたちはコラージュといって、コンストラクションペーパーの上に、切り紙、毛糸の切れはし、わた、雑誌の絵の切りぬきなどをのりではりつける作業もよく楽しみます。イモをつかった版画や、毛糸を絵の具の中にひたして

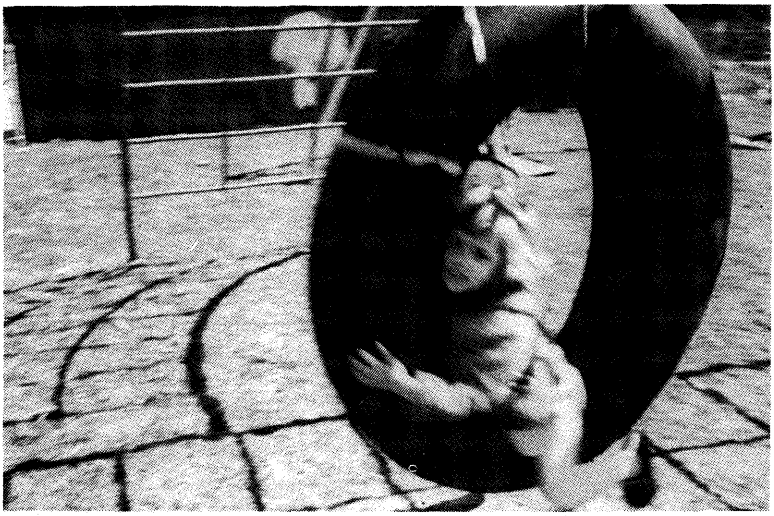
毛布にすわって

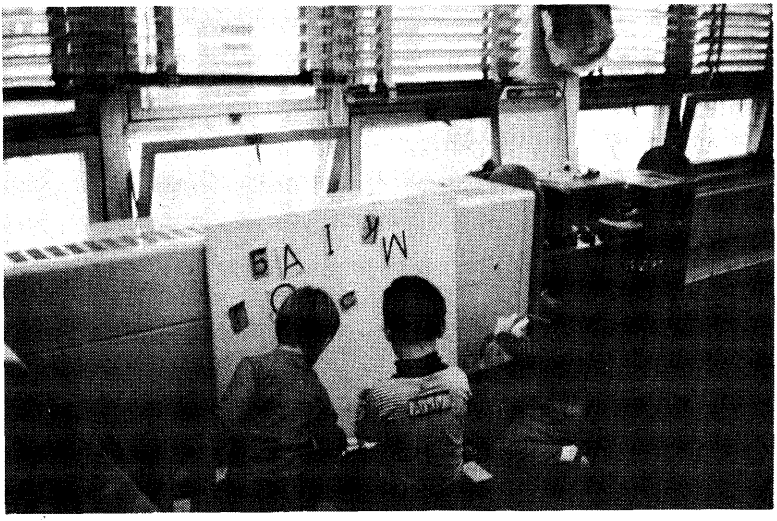
描く絵、歯ぶラシをつかった絵、ぬらしたペーパータオルの上にカラーチョークでかく絵なども時々なされ、これらの活動は、事前に先生や学生たちが自分たちのアイデアや本を参考にして準備します。

手先をつかう活動では、ビーズ（穴のあいた玉に太い糸を通す）、ペグボード（小さい穴のあいた板に細い棒をさして立てる）、スナップボタン（洋服のボタンやスナップがフェルト地についていて、はめたり、はずして遊ぶ）等、既製の材料が多くつかわれます。

サイエンステーブルには、ことりの巣やハチの巣、石、貝、木の葉、植物、魚などが一定の期間置かれ、子どもたちに観察の機会を与えます。ままごとコーナーは日本のそれと何ら変わりありませんが、教師たちは自己のイメージをとらえるのにと、全身うつしの鏡や、おとなが使ってちいさくなった洋服やシャツ、ネクタイ、帽子、くつ、それに子ども用につくられたフェルトのシャツやひだの多いロングスカートなど、たなやハンガーにかけて置いておきます。子どもたちはきかざって得意になってへや中を歩きまわります。

積木コーナーも日本のものと何ら変わりありませんが、敷物の敷いてある音楽コーナーや、お話の時間に床の上に敷かれる毛布は楽しいふんいきをつくり出します。先生あるいは中





おもちゃのいろいろ

心となる学生と数人の子どもが一グループをつくり、同じ毛布の上にすわって本を読んだりお話をしたり、また時には全員が大きな敷物の上にすわり輪をつくり、フィンガープレイや歌を歌ったり、お話をします。

幼稚園で人気があり、常に使われているおもちゃのいくつかをあげてみましょう。

木製の人形家具は子どもたちの楽しい夢をかもし出してくれる貴重なおもちゃです。またパンチングバッグは、たて、よこ、（50×80）センチくらいの布製の袋にやわらかいものをつめた袋で、ひもで天井や高い所からつるし、ボクシングのように打って遊ぶものです。攻撃的な行動が多くあらわれた子どもは、先生が意図的にこの遊びへとさそいます。

さて、アメリカの子どもたちは十時になるとみんなジュースとクラッカーを食べていると想像しますと奇妙な現象に思えますが、事実そうなのです。実験の結果から、朝早くから来た子どもはこの時間ごろになると身体的疲労から攻撃的な行動が多くなるといわれ、栄養も考えて、フルーツジュースと各種のクラッカーを出します。時には母親からのさし入れでクッキーなども出されたり、学生が計画して、アイスクリームやプディング、クッキー、スープなどを子どもたちと一緒につくって食べることもあります。食物を使った活動はその過程でいろいろなことを学べるので貴重な体験と考えています。

この大学のナースリースクールのトイレはへやの延長の一角にあり、男女用とも何の仕切りもないオープントイレです。こどもたちのからだの大きさを考慮して大・中・小と三種類の便器が並んでいます。

③教師になるための訓練

主任の教師になる人は修士以上の資格と、かなりの経験が必要とされますので、ふつうは三十代後半の先生が多いようです。子どもの指導と、学生の指導という立場にたって、時には大学側からの研究の世話もしなくてはなりません。ですからかなり柔軟な人格が要求されます。その下の大学院の学生である助手は、根本的には主任の先生の考えのもとに彼女の仕事にあらゆる面で協力します。実習にくる学生たちはキャサリン・リード(Katherine Read)の「幼稚園」(The Nursery School) を通読しておかなければなりません。ことに大切な部分は抜き書きされて印刷物として渡されます。それまで、教育の場において子どもに接した経験のほとんどない学生たちは、最初は野生の馬のように思わしくない行動や言葉を使ったりしますが、何学期か実習をしますと、必要欠くべから

動かない先生

ざる条件を次第に修得してゆきます。その中でことに大切だと考えられている条件をいくつかあげてみましょう。

まず、学生たちは否定的なもののいい方から肯定的ないい方への訓練をうけてゆきます。「アンドリュー、車を机の上にあげてはいけません」というかわりに、「車は床の上を走るものだわね」といい、「シャベルをふりまわしてはダメ」というかわりに、「シャベルは土を掘るものでしょう」といういい方を学んでゆきます。もともとこういういい方をする理由は、行動治療理論の中で、言葉に出してとりあげた行動は、再認識され強まるという考え方からくるもので、簡単にいえば、「いけません」ということによって、子どもはいけない行動を意識し、興味をもってより繰り返すようになると考えるからなのです。このように肯定的ないい方で子どもと話すことは非常に大切なことだと考えています。

次に、学生は静かに低い落ちついた声で、ゆっくり、はっきりと子どもに話しかける術を学びます。先生は興奮して大きな声を出したりすることは禁物です。いつも微笑を忘れないで、子どもと顔がむき合うよう、背を低くしておだやかに対話することを学びます。そして主任の先生は静かに子どもの動きを観察し、不必要に動く必要はないと考えます。子どもの名前をできるだけ早く覚え、日常の生活場面で一人一人

名前を呼んであげることも非常に大切です。子どもとの会話の中ではユーモアをおり込んで、親しみをかわすようにします。子どもがしゃべろうとしている時にはできるだけよく聞いてあげ、不完全な文章を補ったり、訂正したりしてあげます。また、つとめて質問をしてことばでの表現の機会をできるだけ多く与えます。

子どもに注意をする時は、必ずその理由をいい、なぜ注意されているのかが、子どもにわかるようにします。その場合、子どもに受け入れ態度ができていなくて、依然と攻撃的な態度でしたら、遊びの仲間からはずし、静かな所へつれてゆき、先生と一対一でゆっくり話します。そして、もしまだ子どもが感情的にたかぶっていたら、先生は子どもをしばらく一人にしておき、「お話できるようになったら知らせてちょうだい」といい、子どもが落ちつくのを待ちます。このようにおとなは子どもに自分自身をよく知らしめすために、行動の選択決定権を与え、それによって責任をとらせます。わけのわからない罪の意識で子どもを悩ませるよりも、ある限界内での選択権を与え、その中で自己を尊重し、責任感のある子どもに育てようとしています。

たとえば、ブランコの数より、それに乗りたい子どもの数の方が多い時には、乗っている子どもには二十回こいだら代わりましょうと約束します。前もって約束は守りましょうとよく確めあい、必ず守るようにします。また、番を待っている子どもには、その場で待つか、あるいは砂場で遊んでいれば、あいた時知らせてあげましょうといいます。子どもはどちらか好きな方をとり、しかし実際は多くの子どもは「では知らせて」といい、他の遊びへ行きます。その時、約束したおとなは、子どもが別の遊びに熱中していても、必ずあいたら一度声をかけ知らせます。そしてその後のブランコの乗り手をきめるのです。このように子どもとの約束ごとは非常に大切で、実行できないようなことは絶対約束しないように心がけます。集団の遊びの中で、子どもはどうしても順番を待つということを学ばなければなりません。これはとても効果のある大切な規則で、子どもにとってはルールを学ぶと同時に、自己の存在を自覚するという意味でも役に立ちます。その他に、先生は子どもたちの間で比較や競争心をおこさせるような言動はさけなければなりませんし、すべての子どもに対等につき合うよう行動します。子どもの行動を強化するという意味で、子どもが望ましい行動をした時は、その場ですぐほめるようにします。そのために、先生はそれが自発的なものであれ、指示された行動であれ、子どもの行動をよく観察していなければなりません。賞賛をその場ですぐするとい

うことは、この場合致命的です。

リードが彼女の本の中でいっているように、子どもにモデルを与えないということは、非常に厳格に守っています。それは一言でいえば、子どもの創造性を破壊してしまうからということなのですが、粘土、絵書きなど可塑的な素材をつかった活動ではことに大切です。実習に初めて来た若い学生にはこのことは少しむずかしいのです。学生は子どもと一緒に活動を楽しむよう要求されますが、そこでおとなの技術や考え方で物をつくって先にお手本にしてしまうことは禁物なのです。そうしますと、必ず子どもは同じもの、あるいは似たようなものをつくりますし、その結果を見ておとなのものと比べて嘆くかもしれません。もっとむずかしいのは何だかわからないものを子どもがつくっている場合です。「それなあに？茶わんみたいね」などと聞くのは子どもにとってあまり望ましくないのです。なぜなら、子どもは何も考えないで、粘土の感触を楽しんでいたのかも知れませんし（このこと自体が幼稚園での大きな目的でもあります）、あるいは他のものを意図していたのかもしれません。子どもがわけのわからないことをしているときも、「それなあに？」式の質問より、「その遊びはあなたたちの特別のゲームなのでしょう」「ルールを教えて」等と尋ねると、何でもなかった、たわむれが何か活気を帯びた遊びへと展開してゆくのです。たえず肯定的でユーモラスな中に、お互いにはっきりと言葉で対話してゆくというアメリカ人の特性は、もちろんこうして幼稚園の中にも見られるのです。

④中で遊ぶこども

子どもの側から遊びの内容を見てみますと、必ずしも理想的とはいえないのです。時代の流れで商品としてのおもちゃがあふれ、その中には、あって非常に便利なものもあれば、かえってつくられない方がよかったようなおもちゃも出てくるのです。商品としてのおもちゃは色がつき、はなやかで、詳しくて便利ですが、使いみちが少ないのです。木で柔らかく彫られたおもちゃの家具（無色）は子どもが床の上に並べていろいろなへやを何回つくってもあきないものですが、印刷された紙の上の町に四角の木の建物（着色）だけを並べるのには、子どもは最初しか興味を示しません。その中でパズル（木製の板に絵がかいてあり、それが何枚かの部分からなり、とりはずしができ、組み合わせて完成する）は伝統のあるもので、ずい分長い間この園の子どもたちに親しまれていますが、それも一度組み合せの方法を知ってしまうと、あまり興味のないものになってしまいます。けれどある時期のい

たのしい十時

く人かの子どもはこのパズルに非常に熱心になることもあります。

生活の商品化にともない物品が氾濫し、その結果、物がなくては遊べないという子どもがつくられてゆくのではないかという危険性はどうしても出てきます。現代のおとなの生活と同じように、子どもは遊びを作り出すのでなく、与えられたものの中から選ぶという現象がすでにここにもみられるのですから。

⑤アメリカ幼児教育界の言葉への関心と今後の動向

これまでは私が教える機会を得ましたナースリースクールの全般的な紹介をしましたが、ここではその中からひとつ、言葉への関心ということをテーマにして、アメリカ幼児教育界の大きな流れの中で少し考えてみたいと思います。

人々はなぜそんなに言語発達に関心があるのでしょう。それにはこの国の文化的社会的背景を考えなくてはなりません。コーケイジャン（白系ヨーロッパ人）の他にアメリカには文化のるつぼの名にふさわしく、ニグロ、イタリア人、スペイン系ラテンアメリカ人、プエルトリコ人、中国人、インド人、その他の東洋人など多くの民族が、いわゆるマイナー（少数グループ）と呼ばれて住んでいます。英語が国語としてのこ

の国に住む人にとって言葉の障害は非常に深刻な問題です。研究によりますと、このように言葉の障害をもつ子どもは学校での成績も低いということがわかっています。マイナーの人たちばかりでなく、両親がもともと英語を話す民族であっても、教育があまりなかったり、それにともない、経済的、社会的に貧しいと、子どもの学業に影響してくるというのです。最近ではセンシティビティ（感受性）などといって言葉以外のコミニュニケーションへの興味もおこっておりますが依然と言葉にそのほとんどをたよろうとする国民性は根深いものです。人々は執拗なまでに自分の意を言葉で表現し、他人にもそれを求めます。さて幼稚園ではまさにそれが始まりつつあるのです。つまり言葉中心のコミュニケーションの社会に育ったおとなは、子どもにまた同じことを要求し、教えてゆきます。子どもは小さい時から、できるだけ自分の意を言葉で表現するよう求められます。泣いたり、黙っていたのでは相手にされません。おとなは、あるいは相手はいわなくても分かってくれるだろうという甘えが許されないようです。自己を表現しなくてわかってもらえなかったということは自己の責任であるのです。ともすれば、後になって自分のことさえすればよいという意にもなりかねないこの責任感もまた、幼児のうちから強く要求されます。おとなたちは一日も早く子どもがおとなのように言動できるよう奨励してゆきます。こうした中で子どもも四、五歳になりますと、私たち日本人のおとなが顔まけするほどのことをいうようになります。たとえば「あなたのきょう着ているお洋服はとてもすばらしいわね。私、気に入ったわ」とか、「○○さんはお料理がとてもじょうずね。このスープすごくおいしいわ」などと、実際にはそれほどでもなさそうなのにいいます。

こうした日常生活での会話のあり方に加えて、幼児教育者が言葉にさらに関心をもつようになりましたのは、一九五〇年代にハント(J. Mcv. Hunt)によってアメリカ教育界にみなおされたピアジェ（Piaget）の解く認知発達の理論も影響しているようです。それ以来、幼児教育者たちは知能の教育可能性ということに興味をむけ、その中でも言葉の発達は大きな部分を占めています。一九六五年から始まったヘッド・スタート・プログラムは乏しい環境に育った子どもたちの学業がおとるのは、彼らが学ぶための刺激がなかったからだという考えに基づき、その目標のひとつを認知発達や言語発達に特別の注意を向けて、子どもの精神過程や機能を改善するとしています。さらに一九六九年の秋から始まった教育テレビ番組「セサミ・ストリート」は今や子どもたちの間で人気を博していますが、その目的もまた、子どもの知的発達のた

めに、できるだけの刺激を与えようとするものです。

このように、いずれをとりましても幼少の子どもの知的発達のためには環境の与える刺激の重要性を強く主張しています。認知発達イコール言語発達、と幼稚園でのつめこみ式教育を解くバライターやイングルマン（Bereiter,Engelmann）を代表とする極端な動きは別としましても、多かれ少なかれ、保育の場面でこうした配慮はいろいろな形でなされています。幼児の言語発達のためにつくられた機械を例にとりますと、それには画面があり、ボタンを押して発音しますと、正しければ次の画面に移ります。しかし、正しくなければ、そのまま何度も正しくなるまで発音をくり返す仕組みになっています。あるいは本を使ったものでは、字を覚える前の子どもでもできるように、先生と一緒に絵を見ながら、耳から正しい発音、似かよった音をもつ語彙を捜して訓練します。ある幼稚園ではタイプライターを使って、アルファベットのかけない子どもでも、字を打って読む能力を養っています。以上のような特殊の方法を使わなくても、教師たちは自分たちのアイデアでできるだけ、子どもが正しい、多くの言葉に触れるよう努力しています。

「リッキーは、青いシャツにしまのズボンをはいているわね」「シャロンはオレンヂのコートがとてもおにあいよ。それに赤いブーツもすてきね」「マーク、流しの横の台にあるハンマーを、もって来てくださる？」「積木はテーブルの隣のたなの中に入れましょうね」実際、私たちの日常生活での会話はよく気をつけて聞いていますと、意外に不完全な文章だったり、代名詞などを多く使っているものですが、ここでは教師や母親は、上、下、わき、そば、前、後などの何種類もの英語相当語を正しく使い、助詞や動詞の変化をくり返し教えてゆきます。

幼稚園では、さらに身近な題材を使って語彙をふやし、子どもの認識を高めるよう努力します。頭から手足の先までのからだの各部分の名称を入れた歌や遊びは、子どもたちが自分のからだをつかえるので非常に有効です。色紙をさまざまな形に切り抜いて色や形や大きさを弁別させながら楽しむコラージ、また同じ意図ですでに商品として売られているパズルなどは、単に感覚器官のみにより学ぶのでなく、常に言語をともなって遊ばれるものです。数についての概念を意図したものには、一から十までの数字を指をつかいながら歌う歌や、大きなこよみをへやに作って、サンクスギヴィングデー（感謝祭）やクリスマスまでの日をみんなそろって毎日数えてみることもやってみます。

非常に簡単でよくみられる活動のひとつに、雑誌の切り抜

きを使ったグループ時間があります。教師はあらかじめ種々の雑誌から意図した写真（たとえば、家族構成を念頭にしたものでしたら、おじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さん、お兄さん、お姉さん、赤ちゃんなどの写真、季節をテーマにしたものでしたら四季の写真、地域社会をテーマにしたものでしたら、おまわりさん、消防夫さん、食料品屋のおじさん、郵便屋さん、牛乳屋さん、農夫などの写真、その他各種の車や道具などの写真）を切り抜き、その日のテーマのもとでグループの時間にみんな敷物の上に先生をかこんで集まり、写真を見ながら知っているだけのことをいい合うのです。

最近では、ピアジェの理論に基づいた幼児用のおもちゃまで市販されるようになりました。それらは単に語彙をふやす以上に分類、数、空間、時間、保有などの概念の発達に役立つように意図されています。このようにして、言語を中心とした幼児の認知発達には、ことに若い幼児教育者、研究者にその関心が高く、今後まだまだ続きそうです。また、それとはかかわりなく、この国の文化型にあった言語教育は、教育にたずさわる人々によってさまざまな形で続けられてゆくものと思います。

私がおりました、ペンシルヴァニア州立大学附属ナースリースクールでは、昨年からその名をナースリースクールから幼児教育プログラムと変えました。従来の方式から、現在ある理論に基づいた幼児教育をやってみようという実験的な試みが、若い研究者たちによって始められました。これに対し、年配の思慮深い学者たちは、幼児の真の教育のことや、学生たちの教員養成の立場を考えて、強く反対しましたが、ついに履行されてしまったのです。具体案はピアジェの理論に基づいたグループ、「新しい幼稚園」という名で知的発達に重点をおく、グレン・ニムニック（Gren Nimnicht）のグループ、それに行動治療理論に基づくグループの三つが出されました。その中では訓練された教師はおらず、大学院学生と学部学生のみが子どもとともにいるだけです。子どもの両親たちの反対をよそに実行されたこの計画は、アメリカ国内では決して新しい試みではなく、すでにあちらこちらでなされています。けれど、子どもはあくまで実験の材料でなく、生きた一個の人間であること、そして、その一刻、一刻がきめのこまかい訓練された立派な指導者によって教育されねばならないことを考えて、これらの試みがやがてまた、従来のどちらにもかたよらない全人的な教育をする場にもどってくるだろうし、そうなってほしいと願う学者や教師たちも少なからずいるということもまた事実なのです。